

5

泉 彪之助

一・史料・文献は無限であり、どの形を取るにせよ収蔵スペースは有限なので、どうしても所蔵・廃棄の選択が必要になる。

二・史料は、それを研究する研究者の関心と能力によって生きるものであり、なんでもとっておくというわけには行かない。

三・ペリオが敦煌文書を発見したとき、文書の言語をほとんど読めなかった。正倉院宝物・文書の研究が長い期間を費やして行われているように、史料の研究には組織的対応が必要であり、史料の保存は研究の組織化と共に考えるべきことである。

四・現在の日本の経済状況、医史学、図書館学などへの一般の理解の程度から考えると、国立や企業主体の医学博物館・史料館構想は、不可能ではないが困難であろう。

五・寺畑名誉教授の、雑誌は未製本のまま保存することという主張は、気持は分かるが、未製本雑誌がどんなにたくさん紛失するか知っていると賛成できない。

六・むしろ現在警戒すべきは、過度の電子化である。アメ

リカの大学図書館で書籍所蔵を全廃し、電子メディアのみとしているところがあるが、このような愚かな行為には抵抗すべきである。現在の電子メディアの媒体はきわめて脆弱なものであり、保存性も問題がある。これに対し、粘土版文書、死海文書、敦煌文書等がどのように大きな貢献をしたか考えると、文書史料や書籍文献を絶対に手放すべきでない。

七・医史学会の行事として、医学博物館・図書館・史料館等の担当者を招いて、シンポジウムを行ってはどうか。とくに財政問題について、率直な現状を聞きたい。

八・医史学史料が重要なものとして一般に受け入れられるには、医史学研究自身が社会に貢献するものでなければならぬ(決して功利的な意味ではなく)。その点の反省を、医史学会会員の全員がもつべきである。

6

大 滝 紀 雄

私は上記のテーマを二種類に分けて考えている。

第一は医史料関係記事、新聞、雑誌、広告、パンフレット、案内状、手紙、写真など、原則として私自身の所有物

またはコピーなどで所持しているものの整理保管についてである。私は三十年以上前からこれらを鋭意収集したが、いつの間にか一万部をはるかに超す量となった。これらをコクヨ・ルースリーフ帖(三十穴と二部二十六穴)にとじ込んだところ優に百冊を越えている。総てを五十音順に綴じ込み、文献の必要なときに百科事典式にその部を開けば良い。ただしこれには索引カードの設置が必要である。図書館に常置する索引カードと同じものを作り、これも「あいいうえお」順に配置する。ただし同じ資料でも、人名、場所、物件名等で引くと便利なおことが多く、同じ物件を何か所かに分けて重複記載する場合がある。索引さえしつかりしておけば必要なとき必要事項は簡単に見つけやすい。保管場所にスペースを取られるのが書棚の管理同様、悩みの種である。

第二は医史料関係図書、雑誌類(原則として個人で所有していないもの)の保存管理、利用である。これは図書館等を訪問利用するしか方法がない。

東京大学図書館、順天堂大学図書館、山崎文庫、慶應義塾大学医学情報センター、研医学会図書館、佐倉高校鹿山文庫、野間科学医学研究資料館、京都大学富士川文庫、杏雨書屋などその数は結構多い。さらに日本医学文化保存会で

小川鼎三監修『医学古書目録』が昭和五十一年に発行されている。これは広く一般に照会し古医書を所有している人から得た通知を下に書名を五十音順に並べ、さらに書物所蔵者名と住所を明記してある。しかし、この書物も十分に利用されていないようである。

実際に図書館を訪ねて、原書を読めば一番良いが、かなり面倒である。

そこで私が提言したいのは、日本全国に所蔵されている総ての古医学史料を作ることである。図書名、所在地の記入は勿論である。図書数が多すぎる場合、重複する場合にはセレクトも必要であろう。できれば各史料のコピーを二冊ずつ作ってほしい。複製した図書は一か所にまとめた。仮にその場所をブックセンターと名づけしておく。資料の必要な人は、センターに連絡すれば、必要な部分のコピーを契約に従って送ってもらえる。どうしても原書が見たければ、センターから所蔵図書館名を通知するシステムとする。提言するのは大変簡単だが、実行するのは極めて難しい。この不景気な時代に、図書目録やセンターを作るのには莫大な金がかかるとも考えられる。しかし、諸資料を個人の所有のままに放置するのは、何時のまにか他人の手に渡る危険性がある。資料をセンターに寄付するのが無理なら

適切な価格で買い取って貰う。そのためにはセンターを国立にすべきである。雨後の筍のようにできる美術館たった一個を新築すると考えれば、実現は困難ではない。ただし、これらの事業に対する、識者と一般人の理解と価値観の是正がまず先決問題である。

7 資料集めおよびその保存に関する意見

岡 田 靖 雄

この問題についてはすでに「資料の保存について―あるいはゴミ集めの弁―」(精神医学史研究、第一号、一九九八年)を記しております(自分のあつめているものが「史料」という重さをもっているかどうかには自信なく、「資料」とする)。あくが個人として、また研究会であつめた資料をこのあとどうすればよいか、この一五年ぐらいいおもしろいやらませんでした。皆様ご経験のように、医学部図書館ではふるい本はあたらしい雑誌におされて放置され、大事な本もまま廃棄されます。呉秀三・榎田五郎『精神病者私宅監置ノ実況』(一九一

八年の内務省本は発行一〇〇部だけで、関係者にとってはいわば聖書です。これが東京大学医学図書館の病院未整理図書に四冊かあつて、よほどもちだそうとおもったがその勇気がありませんでした。ところが、整理されてみると本当に整理されちゃって、のこっていないんです。自分があつめたものについては、それをつかった仕事をするのが第一ですが、そのものを子どもにのこしても、かさばって邪魔なゴミとなるだけです。ここはやはり、公的な医学資料館ができてそこに寄託できるようにあればありがたいことです。

雑誌についていいますと、表紙や広告もふくめて全形そのまま保存していただきたい。日本精神神経学会の前身日本神経学会の機関紙『神経学雑誌』の創刊はいつか。製本されたその第一巻を何冊かみましたし、第一巻をもっている人に問い合わせもしましたが、わからないんです。ところが、当会の会員小峯和茂さんの小峰研究所に創刊号がバラで所蔵されていて、明治三五年四月一日とわかりました。表紙の右肩にそれは印刷されていました。製本のときに表紙はみなはずされているんですね。またいま、日本医史学会ができるまでの経過をしらべています。医史学会の前身私立奨進医学会が発行していた雑誌に『刀圭新報』があり、